

2年生から3年生への つなぎ指導のあり方

新課程において、理科を中心に受験に向けた負荷が増大したことで、
低学年時からの国語・数学・英語の学習内容の定着と
受験生への意識の切り替え指導が一層重要となっている。
そこで、今号は、生徒の学力と受験に向けた意識を高めるために、
学年またぎの時期の指導を工夫している2校の事例を見ていく。

学校事例 ①

山形県立鶴岡南高校

6月まで部活動をやり切らせながら 模試の活用で受験生の自覚を促す

SSHの特例を生かした 柔軟なカリキュラム構成

山形県立鶴岡南高校は、2012年度、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けた。新課程における理数科目の内容増加への対応も視野に入れて、学校の方針に沿って単元の配列を組み替えた「SS数学」「SS理科」導入の検討を、取り組みの柱の1つにした。数学の関連事項をまとめて教えたり、理科の基礎科目と4単科目の内容を組み替えたりと、カリキュラムを柔軟化し、知識の効果的な定着を図っている。

また、数学の授業は、以前から、数学科が毎年改訂を重ねている自作プリントを中心に展開してきたが、新課程の導入期に内容の精選

や追加などを行い、進度を速めることを意識した。進路指導主事で数学担当の砂田智先生は「問題中心のプリントを単元に入る前に生徒に配布することで、意欲の高い生徒が自分で先に進めるようになっています」と語る。「SS数学」は2年生2学期終了時点で旧課程と同程度の進度を維持しており、内容増加を考慮すると、実質的にスピードは上がっているという。

難関大志望者集会と県主催の セミナーで意識を切り替え

2年生2学期以降、授業進度と共に重要になるのが、受験に向けた意識の切り替えである。部活動の加入率がほぼ100%の同校では、3年生6月までは部活動にも全力で取り組ませる。そうした中

でも、生徒の意識を学習に向け、いかに受験生としての自覚を促していくかが、例年の課題だ。

大きな節目として同校が注力しているのが、難関大合格に向けた入試の心構えや学習法などを指導する進路集会だ。14年度は11月の進路研修（台湾への研修旅行）後の期末考査が終わる時期に実施し、2年生の約4割に当たる80人程が参加した。2学年主任の野崎剛先生は「現2年生は、進研模試7月記述の結果は比較的良好でしたが、11月記述の自己採点では成績が急降下していました。危機感を持って集会に臨ませたことで、生徒の気持ちを引き締める効果を生んだようです」と振り返る。

14年度は、冬休みを有効活用するための教科面談を12月に実施した。生徒自身が改善の必要性を感じている教科について、教科担当に学習法などのアドバイスを求める。2学年担任の鳥海志帆先生は、生徒の希望制とする意図をこう話す。

「教師が指導しても動かない生徒はいます。そうした生徒には成績が出た段階で『心配ならば、教科

の先生に相談に行ったらどうか』と提案しました。成績を目の当たりにすると、生徒も現状を自覚しやすから、気持ちを切り替えて、教師の力を活用しながら勉強に向かうようになります。出来るだけ生徒が自発的に取り組めるようになることを意識しています」

15年2月には県主催の「難関大セミナー」が開かれる。他校の生徒と共に学ぶことで、生徒が刺激を受け、主体性を高められると考えている。

3年生6月の進研模試でいかに点数を伸ばせるか

生徒の意識を持続させる上で重要なポイントとなるのが、模試の活用だ。同校では、2年生から3年生へと学年が上がる時期に、進研模試2年生1月記述、プロシードテスト、2月マークと立て続けに受験させ、生徒の意識を一気に高めて、4月初めに実施するスタディーサポートで3年生へとつないでいく。

「この時期に模試を積み掛けるように実施するのは、生徒を3年生

としての意識に切り替えさせるためです。先輩が卒業したことや複数の模試により学習に目が向くことで、いよいよ最高学年だと気持ちを引き締めるのです」（砂田先生）

更に、文化部の生徒を対象に進研模試4月記述も行う。同校は音楽部と吹奏楽研究会を中心に文化部の加入率が高い。大会に勝ち進むと3年生の12月まで部活動が続くことから、出来るだけ早めに受験生に切り替えさせる必要がある。

また、進研模試6月マークの活用も重視している。この模試で国英の完成度を見ると共に、志望校合格の試金石として位置付けているためだ。ポイントの1つは、生徒が自ら目標を設定して臨んでいること。事前にガイダンスを行い、「東北大志望者は640点以上が必要」など具体的な目標点を示す。そして、生徒一人ひとりに第1志望校と5教科の目標点を設定させた上で担任と面談を行い、目標を達成するために何が必要なのかを話し合う。教科担任から学習法のアドバイスを受けることもあるという。

2つめのポイントは、模試後の



山形県立鶴岡南高校
砂田 智
すだ・さとし
教職歴29年。進路指導主事。数学科。



山形県立鶴岡南高校
野崎 剛
のざき・たかし
教職歴26年。進路指導課。2学年主任。保健体育科。



山形県立鶴岡南高校
鳥海志帆
とりのうみ・しほ
教職歴17年。進路指導課。2学年担任。英語科。

○2012年度からスーパーサイエンスハイスクール指定校。14年度に山添高校が分校化。○全日制・通信制・山添校・普通科・理数科/共学/1学年約200人○2014年度入試合格実績（現浪計）/国立大は、北海道大、東北大、一橋大、金沢大などに143人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ232人が合格。

指導だ。6月マークは難易度が高くなるため、2月マークより得点ができる場合が多い。目標を達成できなかった生徒には、「この時点で目標点に達していなくても、志望校に合格した先輩はこれだけいる」と具体的なデータを示して励まし、目標を達成した生徒には、油断せず次の目標に向かうようにアドバイスをする。

現2年生はSSHの課題研究や進路研修などの経験を通して、よ

り真剣に進路について考える姿勢や、自分で考え行動する習慣を身に付けつつあるという。後は2年生3学期以降の取り組みを通して、学習習慣を身に付けられるかが入試の成否を握る。

「現2年生は例年以上に定期考査

前の学習会に参加する生徒が多く、切磋琢磨する雰囲気が出てきていると感じます。『第1志望全員合格』という目標に向かって、一丸となって取り組む雰囲気を持っています。いければ、おのずと結果は出ると考えています」（野崎先生）

学校事例 ②

福井県立敦賀高校

模試と課外補習を軸に2年生までに3教科の基礎と学習習慣の定着を図る

2年生10月の学力層別指導が最初の切り替え

福井県立敦賀高校は県中南部の進学校で、普通科の9割、商業科・情報経理科の半数の生徒が大進学を目指す。2004年に福井県の公立高校入試が全県一学区となった後、中学生の上位層が他地域の進学校に進む状況が常態化し、中・下位層の増加が大きな課題となった。更に、新課程移行後は、

学力や学習習慣の定着度において上位層と中・下位層の差が広がっており、学力層に応じたきめ細かい指導が必要となっている。中でも、生徒の弱点として意識しているのが英語だ。そこで、1年生から2年生半ばまでは、英語を中心に3教科の基礎学力の定着を最優先で行い、2年生の学年末までの完成を目標としている。新課程で理科の負担が増えたことについては、「3教科をより早く確実に

に定着させることで対応したい」と進学指導部の辻智生先生は語る。

2年生2学期に、受験に向けた意識の切り替えが始まる。大きな転換点は、10月後半に実施する「学力層別・学習習慣別指導」だ。9月のスタディレポートの結果を基に、学力層や学習習慣などの特徴に応じて全員を5グループに分け、そのグループごとに学習法を指導する。難関大合格を目指す学力上位層のみならず、勉強はしているが学力が伸び悩んでいる生徒、学習習慣の定着が不十分な生徒など、グループごとに課題や目標を再確認し、受験生としての自覚を促す。

12月末には、土日の2日間、1日約8時間の「進学セミナー」で5教科の補習を行った。1日目は国語と英語、2日目は数学と地歴（文系）・理科（理系）で、国数英の3教科は「基礎」「標準」「発展」の習熟度別クラスとした。補習は演習中心で、補習中は教科担当が教室に待機して、生徒からの質問を受ける。3教科と理系の理科の基礎力完成を意識した。



福井県立敦賀高校
辻智生
教職歴26年。同校に赴任して2年目。進学指導部長。英語科。



福井県立敦賀高校
水嶋俊光
教職歴17年。同校に赴任して2年目。進学指導部長。英語科。

○明治時代創立の敦賀商業学校を前身とする。自主・自律 よく考え、すすんで行おうが目標。
○全日制・定時制／普通科・商業科・情報経理科
／共学／1学年約280人○2014年度入試合格実績 現浪浪社／国公立大は、東京大、福井大、名古屋大、大阪大などに89人が合格。私立大は、上智大、立命館大などに延べ159人が合格。

「長時間の学習経験のない生徒たちに、自分たちはこれだけやれるという自信を持たせ、切磋琢磨する集団をつくることを目指しました」と辻先生は取り組みの狙いを明かす。

1月記述と2月マークを 仮想入試として指導

「3年生0学期」と設定している2年生3学期からは、模試などの外部テストを活用したきめ細かい指導を展開していく。14年度から進研模試1月記述に加えて、進研模試2月マークも行い、「仮想入試」

図 2年生2学期以降の指導の流れ

月	受験生ウォーミングアップ期			受験生キックオフ期				受験生チャージ期		受験生ダッシュ期	
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
新課程における指導の流れ	国数英3教科の基礎固め			国数英3教科の到達度を確認				国数英3教科基礎固め修正	夏休みの学習は5教科トータル		
	理社含む5教科の学習開始			理社含む5教科の到達度を確認							
旧課程までの指導の流れ	国数英3教科の基礎固め			国数英3教科の到達度を確認				国数英3教科基礎固め修正	夏休みの学習のメインはあくまで国数英3教科		
				理社含む5教科の学習開始							

*学校資料を基に編集部で作成

と位置付けて、2つの模試のドッキング判定を指導に生かす。それにより、生徒に1年後の本番を意識させると同時に、模試データを基に3学期中に第1志望を固めさ

せるのが狙いだ。更に、3月には1・2月の模試の結果を踏まえた出願検討会を初めて実施する。第1志望の合格可能性を分析し、推薦・AO入試に向けた指導も視野に入れていると、進学指導部長の水嶋俊光先生は説明する。

「2年生の間に具体的な理由と覚悟を持って第1志望を決めさせるのが本校の方針ですが、これまではそれを徹底できていませんでした。2年生3学期の時点でデータに基づいてしっかり目標を定めることで、3年生4月から良いスタートが切れることを期待しています」

年度末の終業式には、2年生対象の学習会を新たに実施する予定だ。「以前から、2年生の1月記述が良い結果でも、3年生5月以降の模試では成績が下がる傾向にあり

ました。2年生の3学期から春休みにかけて、生徒にしっかり学習させることがあまり出来ていなかったというのが反省です。2年生の春休みを3年生に向けて本気で学習させる最後のチャンスと位置付け、生徒の受験への意識を高めていきたいと思えます」（水嶋先生）

3年生5月までの弱点克服で自ら実行できる力を養う

3年生の指導は2年生3月末のスタディーサポートで実質的に始まる。3教科の基礎の完成度と学習習慣の定着度を確認するのが狙いで、特に難関大志望者はS2以上（*）が目標だ。分析会でも基礎がしっかり身に付いているかどうかに注目すると、水嶋先生は話す。

「難関大の合格率と基礎学力の定着度には相関があるといわれています。現2年生は東京大・京都大志望者が一定数いるので、難関大志望者はスタディーサポートで基礎問題が完璧に得点できているかも見て、3年生における指導について考えたいと思っています」

生徒が自ら課題を見付け、克服していく力を身に付けさせることも、学年をまたぐこの時期に重視している。4月記述模試の結果からは、第1志望に対してどれだけ実力が離れているかを判断すると共に、課題克服のために教科ごとに何をしていくかを生徒自身に考えさせ、その結果を基に国数

英の教科担任と面談を行う予定だ。「現2年生は1年生の時から模試ごとに『模試ノート』を作り、問題の解き直しやポイント整理などに取り組んでいます。課題解決のために自分のすべきことを考え、計画を立て、それを実行する力は、ある程度身に付いています。3年生の4月記述模試でより具体的に課題を洗い出し、入試に向けた年間の学習方針を1学期のうちに立てられるようにしたいと考えています」（辻先生）

2年生2・3学期を次年度へのステップと位置付け、主体的に学ぶ生徒の育成に力を入れる同校。しかし、個々の取り組みを単なる受験指導に終わらせず、「教育」として位置付ける視点を忘れてはならないと、水嶋先生は強調する。

「ただ学力を上げることが模試や課外補習の目的ではありません。遅刻や欠席はもちろん、本気で取り組まない生徒にはきちんと指導します。受験を通して生徒が人間的に成長できるよう教師が常に意識し、一つひとつにしっかり取り組んでいきたいと思えます」

* 生徒の学力到達度を<S>～<D>のゾーンで示す、ベネッセの学力指標。S2ゾーンは、「進研模試偏差値（国数英）76.0～78.9相当。難関国立大、難関私立大合格レベル」を指す